

東日本大震災 被災地の春

津波到達地点を

3・11から4度目の新春を迎えた被災地。新しい街の建設が進むが、一人一人の命に刻まれた「あの日の記憶」は消えることはない。ならば、その記憶を教訓へと変え、後世に伝えよう。そんな思いで活動を続ける草の根の団体がある。岩手県陸前高田市の認定NPO法人「桜ライン311」(岡本翔馬代表)。津波到達地点を万葉の桜でつなぐのが目標だ。

「桜ライン311」を追って 岩手・陸前高田市

冷たい三陸の浜風がわたる陸前高田市米崎町。昨年11月15日、広田湾を望むその地は、



ピンクの花でつなげ

「あの日」を忘れないため

全国から集まったボランティアの熱気に包まれていた。「私、幹を押さえます」「じゃあ私が水、掛けますね」。参加者は3、4人のグループに分かれ、高さ3メートルほどの桜の苗木を慣れない手つきで丁寧に植えていく。

遠く、静かに光る海を眺めながら、一人の女子中学生がつぶやいた。「まさか、ここまで津波が来たなんて……」。木を植えた場所は「あの日」の津波到達地点。ここが悲劇の境目になったとは、誰にも思えなかった。

170キロに1万7000本植樹へ

全国から集まったボランティアが丹精込めて桜を植えた - 2014年11月15日 岩手・陸前高田市



植樹した桜の前に立つ岡本代表(中央)と「桜ライン311」のスタッフら(14年4月)

■「悔しさ」が原点 東日本大震災の大津波は、同市で1万7355人の命を奪った。市内には、数百年前にも同規模の津波があったことを伝える石碑が残っている。「歴史の教訓がもっと生かされていけば……」。悔しい

ボランティアを募り、植樹会を実施。これまでに延べ2136人が参加し、約780本を植えてきた。植樹地は、桜ラインのスタッフが所有者を一軒一軒訪ねて活動の意義を訴え、許可を得ている。岡本代表(31)は、津波で実家を流された。家族は無事だったが、何人もの同級生を亡くした。「この地に住む人は誰もが大切な人を失った。も

この思いに突き動かされて立ち上がったのが市内出身の若者らでつくる認定NPO法人「桜ライン311」だ。市内沿岸部の津波到達点を結ぶと全長170キロにおよぶ。そのライン上に10キロ間隔で総計1万7000本の桜を植え、防災の目印として後世に伝えていこうと、2011年10月から活動が続いている。年2回、春と秋に全国から

植樹を終えた参加者は口々に話していた。「植えて終わりではなく、これからも桜の成長を見に通い続けます」。スタッフにとって一番うれしい言葉だ。「桜ライン」は津波の跡地に桜を植え続ける。あの日、色を失った被災地を、ピンクの花で染め上げる。その日まで。(東日本大震災取材班)

後世に語り継ぐ活動開始から3年余。沿岸部には、そこかしこに桜の幼木が息づく。花を咲かせ春を告げる木もあれば、これから育つ木もある。大災害の記憶を、誰からも愛される桜に託して、後世に伝える桜ラインの取り組みは、14年のグッドデザイン賞(日本デザイン振興会主催)の金賞に輝いた。その活動を追ったドキュメンタリー映画も同年3月から全国上映され、大きな反響を呼んでいる。目標までの道のりは、まだ遠い。「100年、200年後を見据え、息長く地道に取り組みたい」と岡本代表。「この活動を子や孫の世代もしっかりと受け継いでほしい」と、地域の中高中生との植樹会も実施している。

「桜ライン311」では、活動を支援するサポーターを募集しています。詳しくはホームページを参照。<http://www.sakura-line311.org/>

遠藤伸幸、鈴木陸人